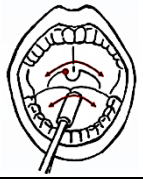
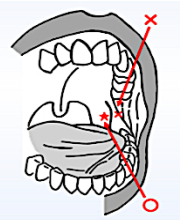
認知機能障害の種類	摂食嚥下障害の特徴	食事介助の方法
□失認： 何かを認識できなません。 □視空間性障害： 物の位置や空間関係を認識できません。	□視覚失認・触覚失認：食物や食器の認識ができません。 □視空間性障害：半側視空間無視などの空間性認知障害があります。食物や食器の位置がわからりません。または、どこに置いたらよいかわかりません。	姿勢の調整、食器の工夫、言葉がけを行います。物に手掛かりとなる印をつけます。手を持って誘導します。無視側に対し、多様なフィードバックをします。触覚、味覚、食感、温度を変化させた刺激を入れます。
□観念運動失行： 正しい動作の方法や手順がわかりません。 □観念失行： 物の使い方や動作の手順がわかりません。	食器など道具の使い方がわからない、うまく使えない。	食器を整理し、単純化し、使用する順に並べます。食具の工夫を行います。
□口腔顔面失行： 口や顔の筋肉をうまく動かせません。 □嚥下失行： 安全に飲み込む動作がうまくできません。	食物を口腔内に取り込み、咀嚼し、喉に送り込むといった随意動作がうまくできません。	保たれている咽頭期の機能を活用し、代償的にシリンジやノズル付きボトルを用いて、舌根部に直接食塊を少量ずつ送り込みます。 □開口障害：K-point 刺激法を行います。 □舌の運動障害：小スプーンで奥舌に食塊を置きます。
□実行機能障害 計画を立てたり、問題を解決したり、注意を持続したりすることができません。	□注意障害：食事の中断や食事中の立ち去りがあります。 □抑制障害：早食いになります。 □常同的食行動：同じものばかり作り、食べるといった食行動が出現します。口の中に食べ物を溜め込んで飲み込みません。咽頭への送り込み動作の開始が困難になります。食物の好みが変化します。異食などの社会的に認められない食事動作が現れます。	□注意障害：食事に集中できるような刺激の少ない環境を整えます。 □抑制障害：小さいスプーンを用い、介助者の誘導によって摂食ペースを調整します。 □常同的食行動：一品ごと一皿に分けて出すなどの配食方法を工夫します。 □口の中へ溜め込み、嚥下の開始困難：嚥下誘発手技を用います。

嚥下誘発手技の名称と目的または適応	実施方法
□アイスマッサージ　冷圧刺激 嚥下誘発を目的とします。	介助者がアイス棒で舌の奥や、上あごの奥の粘膜に沿って左右方向へ数回触れる。最初手前から軽く触れ、反応を見て、徐々に圧を高めていきます。アイス棒を口の外に出し、つばを飲み込ませます。 
□K―point 刺激法 嚥下誘発を目的とします。 偽性球麻痺患者が適応となります。　摂食中に動きが停止する方や、開口障害がなく送り込みや嚥下反射が起こりにくい方が対象です。	介助者が親知らずのあたりのやや後方の内側を軽く触わり、圧力をかけて刺激します。口腔ケアの後、綿棒などを用いて行います。食物が口腔内に残った状態で動きが止まったら、アイス棒やスプーンで刺激することもあります。 

認知症の型	摂食・嚥下障害の特徴	食事介助
□アルツハイマー型 （海馬を含む側頭葉）	時期によって障害が変化します。 □初期：実行機能障害　記憶障害 □中期：失認、視空間性障害、失行、注意障害 □後期：開口障害、口腔顔面失行、嚥下失行	後期になるまで重篤な摂食嚥下障害は出現しにくいです。環境調節が中心となります。記憶や実行機能を補助する介助（介助ヘルパーの導入など）、食べ慣れた食事の提供、注意障害に対する環境の整備を行います。
□レビー小体型 （後頭葉） 認知症に伴うパーキンソン病を含みます。	変動する認知機能、注意障害。視空間性障害を認めます。幻視による摂食動作の中断があります。パーキンソンニズムを伴うことが多いです。	□認知機能の変動：投薬治療による症状の変化を観察しながら、食事に適した生活リズムを探します。 □視覚認知障害：食器、食物の配置にも注意を払います。 □パーキンソンニズム：摂食姿勢の調節を行います。
□前頭側頭型（前頭・側頭葉）	常同的食行動、甘いものへの好みの変化、食欲の増加、過食、抑制障害、実行機能障害、注意障害を認めます。	早食いによる窒息リスクを防止します。小さいスプーンや小分けした食器での配色。ミキサー状の食物形態での提供をします。
□脳血管性 脳の損傷部位によって応じて異なります。	後遺症として、視空間性障害、失認、失語、失行を認めます。錐体路・錐体外路損傷による運動障害や開口障害による口腔期以降の障害が現れます。	出現している認知機能障害の特徴に応じて様々な食事介助を組み合わせて対応します。

用語の解説

失認：何かを認識できません。
視空間性障害：物の位置や空間関係を認識できません。
失行：指示や意識があるのに、体の動きを計画・実行できません。
開口障害：口が開きません。
口腔顔面失行：口や顔の筋肉をうまく動かせません。
嚥下失行：安全に飲み込む動作がうまくできません。
実行機能障害：計画を立てたり、問題を解決したり、注意を持続したりすることができません。
幻視：実際に存在しない物がみえます。
パーキンソンニズム：手や体が震える、筋肉が硬くなるといった運動障害です。パーキンソン病に似た症状を言います。
錐体路：意識的な動作を調節する神経経路です。
錐体外路：無意識的な運動や反射、筋肉の緊張、姿勢の維持などを調節する神経経路です。